

曹洞宗大本山總持寺御移転百年記念 平成二十二年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム: パネルディスカッション・質疑応答

著者	木村 清孝, 納富 常天, 岩橋 春樹, 矢島 道彦
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	16
ページ	33-55
発行年	2011-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000387



パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

木村 清孝

納富 常天

岩橋 春樹

矢島 道彦

司 会

司会

皆さま、お揃いでしょうか。それでは、シンポジウムを開催させていただきます。今日は初めに木村所長から「御移転に寄せて」ということでお話をいただき、その後、ご本山宝物殿の元館長であられる納富先生、そして現館長の岩橋先生のお二人に基調講演をいただきました。お二人のお話の中で、「言いくいけれども……」というのがいくつかありましたけれども、これは仏教文化研究所の学術シンポジウムでございまして、いわゆる客観的な事実在即しているいろいろとお話をいただきたいし、また、現にそうしていただいたわけです。また、岩橋先生におかれても、美術史家としての目でいろいろとお話をいただいたということですね。ただ、いわゆる愛山護法の立場から、いろいろなご意見もあるかもしれません。そこで、独住第八世の栗山泰音禪師がお書きになりました、總持寺の歴史に関する『嶽山史論』という曹洞宗にとっては非常に貴重な歴史書があります。この『嶽山史論』をおまとめになるにあたって、栗山禪師は「宗門の歴史研究において、さしあたり大なる困難を感じる」として五つの点を挙げていますが、その最後の一つとして挙げられているのが「両

本山竝立の事情として斟酌遠慮の多きこと」というものです。解説の部分は省略いたしますが、栗山禪師がおまとめになれる頃は、とくにいろいろと斟酌遠慮も多かったことと思います。しかし、同じ『嶽山史論』の中で、栗山禪師は以下のようにも述べておられます。「我が總持寺は歴史の本山である。歴史は總持寺が一本に本山たるの特色である。歴史は總持寺が一本に本山たるの命である。總持寺より歴史を除き去らばその特色とその生命とは果していかなるものであらうか」と。これを冒頭に読み上げて、これからシンポジウムをはじめさせていただきます。それでは、さきほどご講演いただきましたお三方から、補足的なお話を頂ければと存じます。納富先生からお願いいたします。

納富

「鶴見」については、『吾妻鏡』や『新編武蔵風土記稿』などにより早くから知られています。また建武二年「武蔵国鶴見寺尾郷絵図」もあり、当時の情況を知ることができます。また建長寺開山蘭溪道隆の語録『大覚禪師語録』の中に「鶴見」という文字が出ています。それは、建長寺から鶴見に行き、帰山した時の上堂語に次のようにあります。「山僧近日建長より鶴見に至る。沿途上下往々皆これ樵夫漁夫」とあります。それは山僧（蘭溪）が近々建長寺から鶴見に行った時、沿道で折々往来する者は、皆樵夫や漁夫だったといっています。そのようなことから、早くから鶴見は知られていたということに補足したいと思います。

岩橋

話は飛躍いたしますけれども、私の以前の仕事は禅宗美術に関わるものであり、とくに臨済宗の美術関連のものが多かった。最近では曹洞宗の文化財、広い意味での芸術に触れています。今後、両者を比較していろいろかと思っておりますが、やはり決定的に違うところがあります。臨済宗の場合、鎌倉時代に中国から優秀な禅僧が来日し直接修行の指導に当たっていました。その指導が終了した後、なぜか彼らはなかなか中国に帰る

うとはしません。兀庵普寧のように、「日本人はだめだ」と言つてさつと中国に帰つてしまう例もありますが、これはあくまでも例外に過ぎません。多くの中国禅僧は指導が終わつた後も帰国せず、そのまま日本に骨を埋める場合が多いです。そうした生き様に、やはり日本の禅僧の第一世代は非常に強く影響を受けているように思われます。それに対して、曹洞宗は草創時期の学び方が違います。

司会 ありがとうございます。司会者の特権で、私は木村先生に是非お伺いしたいことがあります。それは、先生が講演資料集の中に「ハイレベルの在家仏教主義」ということに言及されていますが、これについて少し補足をお願いいたします。

木村 先ほどは、あまり時間がございましたので、充分なご説明ができなくて申し訳ありません。私は基本的に、日本仏教の伝統というのはいはり在家主義的な仏教の大きな流れの中にあるように思います。その伝統は聖徳太子の時代にまで遡りうるものです。もちろん寺院仏教も成立しますし、その中で、とくに道元禪師の教団が目指されたものは極めて純粋な出家主義的な方向でした。しかし、日本仏教を全体として考えると、在家的なあり方、あるいは社会の中の「個」のあり方というものがベースになっているのではないかと。日本仏教はとくに『法華経』や『涅槃経』との関わりが深いと言われます。『法華経』の基本的立場は一乗であり、それは誰もが仏になれるという信念に支えられています。また『涅槃経』には、誰もが仏となる可能性がある、あるいは既に仏であるという教説があります。日本の仏教者は、このような教えをよりどころとしておりますので、出家しなくても本質的な意味での仏道をしつかり歩むことができます。さらに踏み込んで言えば、常に現実の社会の中、民衆の中においてこそ、人々とともに仏道を歩み、ともに仏教者となり、悟りを開き、

あるいは、幸せや安らぎを得ることができるといえることが基本線になっているのではないか、瑩山禪師はこの路線をしつかりと受け継いでおられるのではないかとも思うのです。なお、「在家仏教主義」の前に「ハイレベル」とわざわざ付け加えたのは、人々の心を本当の意味で清らかにしていくという方向性が必要であり、そのためには、一方で在家的なあり方において陥りがちな卑俗さに対する厳しい批判というものも不可欠でしょう。とすれば、その在家的なあり方の中で本当の仏道を実現することには、大きな困難があります。ところが、その方向性に関しては、瑩山禪師の禅の世界に極めて強く示唆するものがある、と私は思っています。その一つが、例えば坐禅そのものに関して、瑩山禪師は「大悲の坐禅」を明確に掲げておられます。それが具体的にどういうものかという点、これも容易に答えることができない問題です。いずれにしても、両祖をいただく私たちは、どれほど難しくとも、道元禪師の「大智の坐禅」と、瑩山禪師の「大悲の坐禅」の統合を目指さなければなりません。このことはまた、坐禅に止まらず、さらに我々の生き方に関しても言えるでしょう。というのは、これから仏教が生き残っていく、本当の意味で世界の中で生きていくためには、どうしても社会的な貢献、社会的活動という側面も強く求められてきます。寺院という恵まれた場を生かす形で、一方では仏法の継承によって純粋な仏のいのちを引き継いでいくとともに、他方では、寺院の枠を越えて社会に進出し、常に民衆の中でさまざまな人々と関わりながら展開していく方向が出てこなくてはなりません。例えば、今、中国や台湾では「人間仏教」という運動が盛んになっています。「人間」と書くとき、日本語では、個人個人の人を指しますが、中国語としては、基本的には、人と人との間、つまりコミュニケーションとか社会を意味する言葉になります。一時期、エンゲージドブレイズム、つまり社会参加型の仏教も流行りましたが、社会運動だけでは、私はだめだと思えます。一方できちんと、伝統の中にある宗教のないのちの大切さを伝えていく装置がなくてはならない。要するに、智慧と慈悲、あるいは出家仏教と在家仏教を、個

人のレベルでも、宗門のレベルでも、調和させ、統合していくあり方というものが求められるのではないでしょうか。在家仏教という言葉も色がついていますので、あまりふさわしくないかもしれません。しかし、私の言いたいのは以上のようなことで、これを仮に「ハイレベルの在家仏教主義」と名づけさせていただいたいです。

司会 ありがとうございます。僧俗、あるいは、曲がりなりに、出家と在家というものがあるわけですが、お坊さんたちは、実質的には、わずかな方々を除いて妻帯しています。今先生が仰っている「ハイレベルの在家仏教主義」というあり方は、僧侶においても同様であると理解してよいものでしょうか。

木村 そうですね。

司会 もしそうだとしますと、ご本山の僧堂も含め禅宗の僧堂で、釈尊以来の伝統に従って行を重ねるという意味の修行については、その意義づけはどうなるのでしょうか。

木村 それは先ほども触れましたように、きちんと、それぞれの宗教伝統が持っている本質的な宗教的生命といいたいでしょうか、それを受け継ぐことは根幹だと思えますし、僧堂修行というのはその中核をなすものではないでしょうか。在家主義的な方向性をもちながら、その中でこれを継承していくというのは、極めて難しいことにはなるとは思いますが、あり得ないとは思いません。求め方、あり方によっては、その道は可能ではないかということですね。例えば『維摩経』の維摩居士や『勝鬘経』の勝鬘夫人がその一つの典型ですが、これらに学

びつつ、独自のあり方を見出さなければなるまいと考えるのです。

司会

ありがとうございました。これに関連してもう一つだけお聞きいたしますと、例えば、在家の方々に対する接化・教化として、授戒がありますけれども、授戒などを通してということでしょうか。

木村

そうですね。授戒も大きいと思います。ご存知の方も多いかと思いますけれども、仏教においては、基本的に戒律を受けることが必要です。しかし、戒律というのは、人間の正しいあり方はこうだということですから、あまり難しい話ではありません。生きとし生けるものに対して優しい心を持ち、生命を大切にするとか、物を盗まないとか、そういう根本的な人間としての倫理性を教えてくれるのが戒律の基本です。この戒を授け、戒を受けるという儀式では、「これこれをしつかりやっていけますか。」ということを経が問いかけ、「はい。そのようにいたします。」と誓います。そういう問答が各条ごとに行われます。そして、師に問いかけられ、口にしてそのように誓うということは、人間のあり方を固めていく、あるいは方向づけるための一つの力になります。それを仏教では、昔から「戒体」、つまり戒の本体が身につくというふうに言います。いわば、仏との約束をすることによって、そのように生きなくてはいけないという、一つの規制力や行動の方向づけがきちんとなされるというわけです。ですから、そのことが一つのベースになることは確かだと思えます。

司会

ありがとうございます。瑩山禅の特徴については、さきほど木村先生にご説明いただきました。納富先生、定賢律師の住持されていた寺を、瑩山禅師は譲り受けたというようなことだったので、それはもともと總持寺といったのでしょうか。もともとの名前は何ですか？それからどういった性格のお寺だったのでしょうか。その辺

のことをちよつとご説明頂けますでしょうか。

納富

もともとは諸岡寺観音堂です。どのような性格の寺であったのか、よくわかりませんが、古文書などによりまずと、諸岡寺観音堂には、弘安六年（一二八三）五月十二日「櫛比莊二个村諸寺仏供田注進状」に御仏供田五、仁王講経田九、御花米田一、修理田七、灯油田五、修正田六、合計三段三（三は一段の十分の三）あつたとあり、また永仁三年（一二九五）十一月三日「櫛比莊預所平某田地寄進状案」には毎月七日間の護摩供の経費として、田地六（一段の十分の六）を平某が寄進していますが、徳治二年（一三〇七）九月二十一日にも某が諸岡寺の護摩供料田として田地一（一段の十分の一）を寄進しています。瑩山禪師に諸岡寺観音堂を寄進した定賢権律師は三密（身・口・意の三密）修法勤行の優れた人だつたとありますから、これらを勘案しますと、密教系の寺院だつたことは間違いありません。密教は栄西が「東寺・天台の両門あり」（興禪護国論）と言っていますように、天台（台密）と真言（東密）がありますから、いずれかわかりませんが、栗山泰音『總持寺史』では諸嶽寺は素と真言宗としています。今枝愛真博士は白山天台が大きな影響を与えているから、天台ではないかと主張しています。また『諸嶽開山二祖禪師行録』に「能之總持寺元律院、奇夢に繇り、律を更め、禪と為す」（原漢文）とあることから律宗ともされ、さらに辻善之助博士は定賢律師とあるから律宗と主張しています。また横関了胤『總持寺誌』は真言律宗としています。このように真言宗、天台宗、律宗、真言律宗などの諸説がありますが、よくわかりません。總持寺成立の由来が書かれている瑩山禪師真筆『観音堂縁起』（重要文化財）にも寺院の性格については何ら触れていません。わずかに「当寺はもと教院たり。改めて禪院に為さんと欲す」とあるだけです。ただ寺号については「感夢に依つて總持寺と号す」とありますが、『總持寺史』によりまずと、定賢律師の譲与を思つて、真言の意義をそのままとり、寺号を總持寺としたとあります。

司会 それをちよつと伺いたいと。

納富 「総持」とは保持する行為、記憶の保持、精神集中などを意味する言葉とされています。インド仏教については専門ではありませんが、古代インドでは文字はありませんが、バラモン教以来聖なる言葉は文字にしないということになっており、口による伝承以外、伝える方法はありませんでしたので、記憶は最重要でした。そういう意味をもつ総持寺ですが、曹洞宗内に同じ寺名があるか、『曹洞宗寺院名鑑』『延享度曹洞宗寺院本末牒』『總持寺住山記』さらには五院の輪住帳をみましたところ、大日寺、不動寺（院）、毘沙門寺、金剛頂寺など密教に関係ありそうな寺名は結構あります。しかし總持寺という寺名はわずかに一つ総持尼寺（愛知県岡崎市）があります。また関係するものとして、総持庵（広島）、総持院（播州）などがあります。

司会 はい。今お話にできましたけれども、總持寺という寺は、真言宗にはたくさんあるようですね。曹洞宗には、今あまりないというお話です。総持というのは、陀羅尼というサンスクリットの音写語で、その意味をとって総持というふうに、これは意識ですね。それが寺名に使われている。そのほとんどの例が真言宗のお寺で、これを瑩山様がそのようにお付けになったのですか。

納富 もちろんそうです。

司会 だとすると、やはりその辺、いわゆる密教的なものを意識しておられるのでしょうか。

納富

あり得たかもしれません。これは独断と偏見ですが、瑩山禅師の師、徹通義介禅師は非常に進歩的・積極的宗風でした。それで、その影響を瑩山禅師は多分に受けていたと思われます。また、瑩山禅師は十八才の時に遍参し、東福寺（京都）や興国寺（和歌山県由良町）に行っています。東福寺は円爾弁円（一二〇二〜八〇）が開山で、禅密兼修の禅宗寺院です。著書は『聖一国師語録』『坐禅論』などのほか『大日経見聞』『瑜祇経見聞』など密教に関するものもありますが、『東福開山聖一国師法語』に「禅は仏心であり、律は外相、教（密教も含む）は言説、称名は方便で、これらの三昧は皆仏心から出ている」としていますから、禅が中心であったことは言うまでもありません。瑩山禅師はこのような円爾の弟子で東福寺二世の東山湛照や、同じく弟子で文永三年（一二六六）入宋もし、最新の宋朝禅を伝えた東福寺四世の白雲慧暁の膝下に投じ修行しています。また由良の興国寺開山無本覚心（一二〇七〜九八）は高野山伝法院覚仏に密教を習学し、金剛三昧院退耕行勇（榮西の弟子）に参じ、道元禅師に菩薩戒を受けています。また积円榮朝（榮西の弟子）の弟子蔵叟朗誉や、入宋し十三年在宋した天祐思順に参じ、その後渡宋しています。はじめ円爾の紹介状を持ち、無準師範を尋ねますが、すでに没していましたから、『無門関』の著者として有名な無門慧開に参じ得法しています。『法燈国師坐禅論』や『法燈国師法語』などがありますが、『法燈国師法語』に「諸法中禅門最勝、仏心宗なるが故に、諸行中坐禅最勝、大安樂の行なるが故に」とあり、道元禅師と通ずる所もあります。しかし粉河寺（和歌山県粉河町）の子院誓度院の規式「誓度院規式」八条を定めており、それには禅院と同じように、三時勤行、四時坐禅をあげていますが、さらに手法・不動法・愛染法など、真言の行法も規定しています。そればかりか三時勤行にも愛染法、五大尊、薬師真言、消災呪、大金剛輪真言などの真言を誦することになっています。このように瑩山禅師は禅密兼修の東福寺・興国寺で修行されていますから、その宗教思想形成にあたり、密教的影響は当然あったと思います。

司会 瑩山禪師の禪と道元禪師の禪とを比べて、だいぶ違うなどいうところは、いわゆる祈祷重視とか、そういう点

でございませうね。

納富

この問題は非常に重要な問題ですから、少し詳しく述べたいと思います。瑩山禪師の禪は基本的に道元禪師の正伝の仏法に只管打坐であることは間違いありません。木村先生は道元禪師の「智の坐禪」に対し、瑩山禪師は「悲の坐禪」と言われましたが、一つは前にも触れましたように、瑩山禪師の師徹通義介禪師は、師の懷辨禪師の命により、正元元年（一二五九）、宋朝禪林の規矩や伽藍結構の調査のため入宋しています。義介禪師の入宋は、道元禪師入宋・帰朝（安貞元年（一二二七）後、三十二年を経過しています。その間には道元禪師所縁の天童山も焼失するなど、宋朝禪林も大分変容したと思います。例えば、空海の後に、天台の円仁・円珍が同じように長安に密教研究に行っています。その間三十年から四十年経過しています。密教所依の經典が異なっています。空海の時代は二教一論（大日經・金剛頂經・菩提心論）でしたが、円仁・円珍の時代は三經一論（大日經・金剛頂經・蘇悉地羯羅經・菩提心論）となっていますように、蘇悉地羯羅經も所依の經典に位置づけられています。そののみならず、この蘇悉地羯羅經は空海も知っており、その著『真言宗所學經律論目録』（『三学録』真言宗徒の学習に必要なもの）では戒律の部の筆頭に分類されています。このように三十年から四十年で大きく変容していますから、義介禪師が直に体験した宋朝禪林も変容していたことは間違いないでしょう。次にはこのような宗風を継承し、また自らの東福寺や興國寺をはじめとする宗教体験を踏まえた瑩山禪師の、その著『瑩山清規』は『永平清規』『禪苑清規』などに依りながら、『大仏頂万行首楞嚴秘密神呪』『大悲円満無碍神呪』『消災妙吉祥神呪』『仏頂尊勝陀羅尼』など密教的なものを導入しています。また注意したいことは、道元禪師が嘉禎年間（一二三五～三七、若い時期）に門下僧に示した法語を集録した『正

法眼蔵随聞記』に「只時にのぞみ、事に触て、興法の為利生の為に諸事を斟酌すべきなり」とあるのみならず、道元禅師の『御遺言記録』にも「当寺（永平寺）は勝地たるに依つて執思する処と雖も、それまた世に随い、時に随うべし。仏法はいずれの地においても所行の勝地となすなり」とあります。このように、時にのぞみ、事に触れて、世に随い、時に随つて行ずる所を勝地と思ひ、興法利生に努めるよう指示していますので、瑩山禅師が永光寺で密教的なものを導入したのも、偏にこれに従つたまでと考えてよいのではないかと思います。

司会

はい。さて、会場からですね、先生方にいろいろご質問いただいておりますが、その前に、今日は学会でご欠席の所員関根透先生からお預かりした資料があります。これは先ほどご紹介いただいたような文化財とはちよつと違つて、總持寺の大梵鐘のようですが、どの程度この大梵鐘のことはわかっているのでしょうか。実はですね、年代的には、ほぼ一致するのかもしれないが、一九一四年（大正三年）の英文の記事、シンガポールの新聞のようですが、それを見ると明治を記念するために、鶴見の曹洞宗の御本山が、少し前に東京小石川の兵器工場で大梵鐘の鑄造を準備した。東京帝大の伊東博士の指導で、最近その大成功のうちに鑄造が終わつたというような記事です。知恩院の鐘に匹敵するような、非常に大きな鐘であるというのですが、御本山で鑄造されたらと、御本山の方ではいつてらっしゃるかと思ひますけども、これはどこで鑄造されたのか、そういうデータはあるのでしょうか。どなたかご存知の方、いらつしやいませんか。

納富

先ほどの講演でもちよつと触れたと思ひますが、多分建功寺住職と協議の上、成願寺が境内を寄付されたことも鶴見に移転する大きな原因になったことはお話ししました通りです。建功寺は、成願寺の本寺にあたります。その建功寺十五世栴野宏道師の日記『驢事馬事』によりますと、大梵鐘（横浜市有形文化財）は大正二

年十月十九日、山内で地鎮祭ふいじを行い、翌二十日午前十一時に鑄込み、午後五時半に終了したと簡略に書いてあります。また大梵鐘に鑄出された勅特賜大圓玄致禪師素童撰、大内青巒書の銘文に「(前略) 放光堂先ず成る。仍て恭しく仏祖安座の儀を修す。実に四十四年十一月五日也。爾來衆僧の弁道以て闕無しと雖も、尚洪鐘を欠く。衆以て憾と為す。乃ち醜金を募縁し、大いに鐘輪を開く。大正二年十月二十日蒲牢(鐘) 範を脱す(後略)」(原漢文)とあります。詳細にはわかりませんが、重量十八・七五噸にも及ぶ梵鐘の鑄造には、随分材料が必要だったと思われる。寄付金をはじめ、近隣寺院の梵鐘や、一般家庭にある手鏡などを寄付してもらっています。それは「大梵鐘鑄造原料鐘寄付領納証」も残っていますから確かです。また醜金(一口一円五十銭)にあたっては、石川素童禪師の出身地である愛知県から莫大な援助があつたようです。大梵鐘内部刻銘に、一万六千人の大梵鐘鑄造会員の名前がありますが、愛知県が大勢を占めていると聞いています。また現在地で鑄造したことも間違いないと思います。もし他の場所で鑄造したとすれば、あの小高い雙眸丘ふたみがおかに、現在なら周辺も開發されていますから、可能かもしれませんが、当時としては運び上げることだけでも到底無理と思われる。また、大梵鐘の図案は、報知新聞(読売新聞)の公募により、渡辺仁の作品を採用し、鑄造師は高橋才治郎と西沢吉太郎です。

司会 そうとすると、御本山のホームページで記載されていることと一致しますね。ホームページには、「図案は懸賞公募し、渡辺仁工学士が選ばれ、鑄造作者は高橋才治郎・西澤吉太郎、銘文執筆者は大内青巒である。」とあります。たぶんおそらくは、御本山の境内で鑄造されたというのが、事実のようでありますね。

会場 あの梵鐘の件につきましては、『佐久間権蔵日記』にも出ていますし、それから、当時の『横浜貿易新聞』(現『神

奈川新聞』の記事にも、梵鐘は大本山で鑄造されたということが書かれておりました。そして、『佐久間権藏日記』にもありますように、梵鐘の鑄造は一度失敗して、鑄なおしたというようなことも書いてありました。それと、本山で出来たということで、公募して、伊東忠大先生が審査委員長になったというようなことも。

納富 ありがとうございます。そしたら現在の大梵鐘は、再鑄された大梵鐘ということになりますか。

会場 そうですね。

納富 そうですね。ありがとうございます。それでは、再鑄された大梵鐘に、さきほど触れました勅特賜大円玄致禪師素童撰以下、大正二年十月十九日とある銘文とはどんな関係になるでしょうか。

会場 そのことについてはよくわかりません。もう一度調べてから詳しいことは改めてご連絡させていただきます。

納富 是非、お願いいたします。あれだけの大梵鐘ですから、募金の問題もありますから、一朝一夕には事は運ばなかったと思いますが、ただ『驢事馬事』には簡略ながら前日の地鎮祭から、当日の鑄造状況まで記録されていますから、それは間違いないと思います。また大梵鐘に関連して十八・七五噸もある大梵鐘を吊り下げている鐘楼も大仏様式であり、注目しなければならないと思っています。

司会 それでは、会場からいただいています質問に対してお答えいただけます。まず、来場者の津田様からいただい

た納富先生に対するご質問ですが、内容は、「總持寺の移転というのは極めて大事業だったと思います。年代はそう遠くないのですから、このための企画システムについては何も残っていないのですか」と。

納富 企画システムですか。

会場 はい。要するにどうやってどうやってなにに、例えばそれをどう使ったとかね。そういう類のことですよ。要するにあれだけのものをこちらへ造るわけですから、土地をどれくらい買うとか、どこに仏殿を建てるだとかね、そういうような設計図、デザインとかそういうのは、やはり文章で残っているのではないかと思います。

納富 敷地については前に触れましたように、買収した土地は三万一千百十坪、譲与された成願寺の境内が一万七千六百七十九坪、合計四万八千七百八十九坪（現在は十五万坪）であったことがわかっています。また伽藍再建費や用地買収費については「諸殿堂再建并土地設計」として百九万二千五百三十三錢三厘が計上されています。しかし伽藍結構・設計図などについては知りません。ただ明治四十四年十一月四日の『横浜貿易新聞』（号外）「總持寺御移転記念号」に伽藍結構は掲載されています。参考にして下さい。

司会 次の質問ですが、質問者は多分、地元でいろいろ研究しておられる方なんでしょうか。質問の内容は、「總持寺の鶴見移転に際して、京浜電鉄（京浜急行）の影響（資金提供など）、或いはもつと積極的な動き、調停とかがあったかどうかについてお伺いしたく存じます。京浜電鉄は川崎大師、穴守稲荷と寺社への参詣者を旅客の柱としておりましたので、總持寺もその延長線にあったのではないかと思つたのです。兩宮敬次郎の碑

も何か関係があるのでしょうか」と。

納富

京浜急行の影響は確かにあつたと思います。ただ、お断りしなければならぬのは、私は地元鶴見については十分に把握しておりません。能登祖院の関係は、いろいろな近世資料や、門前町（現在輪島市門前町）役場に資料があつて、『新修門前町史』の編纂にも関係していましたが、地元住民からも見聞しましたが、鶴見関係は今後地域社会の人からいろいろお聞きして研究していきたいと思つています。

司会

ありがとうございます。これを機に、また調査をしていったらいかがかということですね。さて、唐さんという方から岩橋先生に対するご質問ですが、「十年前に鶴見に引越してきました唐です。總持寺には大変興味があり、中国語のホームページで検索してみました。横浜の有名観光地として紹介されていますが、一つの記事がありまして、本当かどうか教えて下さい。内容は、ある日本の医師が数十年前、中国のあるお寺から何百年も保存されている住職のミイラを日本に持ち帰り、現在は横浜總持寺に保存されているというもの。これは事実なのでしょうか」と。

尾崎

大本山總持寺の放光堂の裏、常照殿というところに、石頭希遷のミイラが安置されています。一応非公開ということで、一般の方にはお見せしていません。そのミイラは、日中戦争中に、火事でお寺が焼けた時に、その火の中に飛び込んで、持ち出したのです。それでその後、話せば長くなるんですけども、ずっと青梅の方の、廃寺に保存されていたんですけども、それをミイラの研究者が見つつけて、そしてそれを記事にしたところ、曹洞宗の乙川瑾英禪師が「曹洞宗に関するものなので是非こちらで引き取りたい」というのももらい受けま

した。そして石頭希遷の本物のミイラかどうかというのは、時代的にわからないんですけども、少なくとも日本のミイラでないことは確かなんです。中国でつくるミイラと、日本でつくられた生仏というのは、製造方法というのが異なるのです。頬と膝のところが落ちないように漆布をはりつけるというのが中国式なんだそうです。それから、実際に火事で焼けたので、焼け焦げの痕があるということで、それは間違いないだろうというふうに言われています。

司会 所員の尾崎正善先生がお答え下さいました。会場には石井修道先生もお見えます。先生にもお話をお伺いいたします。

石井 そのミイラは石頭希遷かどうかはわかりませんが、石頭禪師は中国湖南省の南岳衡山という地域で活躍された方ですけども、その地元の希望もありまして、ミイラを中国に返すという話は、一応齊藤信義老師の頃、出たことは出たのですが、まだ実行はされていないようです。私は、東京駅前の大丸で一時公開されたことがありまして、その時、見たことがございますけれども、まあ、信仰の対象ですので、今は非公開です。そのうち中国にお返ししたいというのは本山側の意向でもあるようです。

司会 会場の吉田先生はいかがでしょうか。

吉田 湖南省の衡山には南台寺というのがありますが、石頭禪師所縁の寺院です。そこには実際に私も行きました。ミイラ返還に関する依頼の話はそこでも伺いました。もともとはこの南台寺の谷の奥の方にあつたと。私は

行きませんでした。そういう話で、齊藤信義老師が監院をされていた時代にそれを進めようとしたのですが、中国と日本の外務省にあたるどころの折衝で、仲立ちをしていた中国の方とはいろいろないきさつがあるのですが、詳しくは知りません。そこで膠着状態になってしまったというふうには聞いています。以上です。

司会

ありがとうございます。次に本学の学生から納富先生に対する質問です。「さきの袈裟の環のことで永平寺と總持寺の間に論争が起こったというお話がありますが、両寺院の関係についてももう少し詳しくお話を伺いたいです」と。

納富

これも前に總持寺と近代教団の成立のところでも述べましたが、天正末期（二五九〇年頃）から出世道場（永平寺は本来修行道場でしたが、天正十九年（一五九一）、後陽成天皇から出世道場の繪旨を受けている）として、転衣出世者（転衣料五兩）の獲得をめぐる争っていますが、それは転衣料（官金とも言う）は寺院経営の大きな財源だったからです。また寛永四年（一六二七）に発生しました永平寺祚天、大中寺松薫による衣体剥奪事件（總持寺諸法度に定めた修行期間に満たない者や、繪旨なき長老の衣・袈裟を剥奪し、再び転衣参内を希望する者を、永平寺で出世させようとした。祚天・松薫は、伊勢と越後に流罪）、享和二年（一八〇二）、永平寺五十世玄透即中（一七二九〜一八〇七）は道元禪師五百五十回大遠忌の記念事業として、『正法眼蔵』を出版したことで有名ですが、月舟宗胡以来の古規復古運動を推進するとともに、『永平小清規』を著し、宗門全寺院に強要し、あわせて環紐の袈裟は、道元禪師の家訓に反するとして、祖師像の環を取り除き、かつ黄檗宗に関係するとして木魚まで破壊する始末でした。總持寺は開山以来『瑩山清規』に基づき行持を行っているとして反対しています。この袈裟の問題はその後も争論が継続し、やがて顕在化し、嘉永三年（一八五〇）

から文久元年（一八六一）まで、十二年間にわたって論争しています。これにはいろいろ複雑な問題もありました。それは、道元禅師の師である天童如浄禅師や道元禅師の頂相にも環がついているものもあったからです。またこの争論はただ単に、永平寺と總持寺の争いに止まらず、永平寺は島津氏―老中―大奥―大老井伊直弼に対し、總持寺は、前田家―御守殿老女―大奥―寺社奉行という構図で争っています。またこの論争で、永平寺もあるいはそうだったかもしれないませんが、總持寺はより借金するわけです。地元の回船業者（北前船主）および京都の法具屋から大量に借金しています。

司会

ありがとうございます。次は佐藤様から、三人の先生方にそれぞれ質問が寄せられています。はじめに岩橋先生に対する質問で、「宝物殿の展示のコンセプトや期間について長期的な展望に立つてお伺いしたい」と。

岩橋

その方の属性によって、お答えが変わってまいります。率直に申し上げますと、宝物殿は展示施設としては極めて不十分なので、中期的な意味で、本山に対しては、まず設備をもう少し整えるようお願いしたところ、一部動き出しています。それから、営業的に言いますと、今の所在地は非常に不便です。總持寺の奥にあり、坂の頂上にあるため、駅の方からお越しになる場合、とくに年配の方はかなり大変だということは、本山の一部の方々も承知されています。やはり、宝物殿として理想の場所は足の便の良いところに設置するのが一番よろしいかと思います。

司会

ちなみに、總持寺御移転百年の記念展示のことについてもお話を伺わせていただきたいと思います。

岩橋

はい。總持寺の横浜ご移転を記念いたしまして、来年の四月十六日から五月二十二日まで、神奈川県立歴史博物館で「總持寺展」を開催いたします。總持寺の文化財から代表的なものを選んで、先ほど申し上げたような「世の文化財」と「移転後近代施入の文化財」という二つの面から展示します。それで今、県立歴史博物館のスタッフと、現場で何をどのように展示しようかと検討に入っているところです。やる以上は、人が入らないと。これはもう全て営業活動なものですから、しかも、無料で来られても困ります。無料は今、博物館ではカウントしなんでしょう。有料入館者をカウントの対象とします。どうぞよろしくお願いいたします。

司会

次の質問は「現在の總持寺と永平寺との関係はどうなっているのでしょうか。また、大本山總持寺と能登にある總持寺祖院との関係はどうなっているのでしょうか」と、納富先生に聞いておられます。

納富

まず、永平寺と總持寺の関係は、他の宗派のように一宗一本山という体制と異なり、一宗両本山の体制です。總持寺と永平寺は同等の大本山です。歴史的にみますと、天正時代ともに曹洞の本寺、出世道場の綸旨を賜っています。また前にも述べましたし、資料九頁にも掲げておきましたように、元和元年（一六一五）における徳川家康が發布しました「總持寺諸法度」（永平寺にも同時に「永平寺諸法度」を發布）により、両寺とも本寺として認められています。また資料十頁に掲げておきました明治五年における政府の「要領五ヶ条」、明治十二年の「両山盟約」などを経て、昭和二十七年の曹洞宗宗憲に「永平寺、總持寺は各大本山であつて、これを兩大本山という」とあります。なお永平寺は室町中期以降外護者に恵まれず、また末寺も少なく、衰退していましたが、總持寺通幻寂靈（瑩山禪師の孫弟子）喪記の衣物唱得錢のうち、十貫文を永平寺齋粥費用として、永平寺に納入しているのをはじめ、その門下の器之為璠の永平寺頽廢の様子を詠んだ一偈、さら

にはその門下曇英慧応、為宗仲心、金岡用兼らが永平寺を復興していること、あるいは大智（瑩山禪師の資明峰素哲の弟子）の永平寺衰運を暗示した、「永平塔を礼す」と題した二偈、また承応元年（一六五二）、総寧寺嶺巖英峻が永平寺二十七世として昇住して以降、二十九世鉄心御州から明治維新前後の六十世臥雲童竜まで三十二人、二百十一年の間、總持寺末の関三刹（総寧寺・竜穩寺・大中寺、幕法布達の窓口）から永平寺住持になっていることを付言しておきます。次の總持寺と祖院の関係ですが、時間がなく申し上げることができませんでしたが、これも資料十一頁にも掲げておきましたように、鶴見移転にあたり、地元住民が出した要望書（明治四十年「啓沃書」に成文化）の③④⑤などは、現在も基本的に継承されていると思いますが、昭和四十四年別院を祖院に改称している以外、祖院の運営や経営費などについては改変されていることは言うまでもありません。

司会 ありがとうございます。もう一つ納富先生に対するご質問があります。「神仏分離令、排仏毀釈によって、それ以前とその後では、曹洞宗の檀信徒に何か考え方で影響とか変化を与えたことはあるのか」と。

納富 神仏分離令につきましても、資料には掲げましたけれども、時間がなく触れませんでした。排仏思想の萌芽として、江戸時代から反本地垂迹説や、儒学者の神道論、国学者による復古神道が盛んに行われました。とりわけ平田篤胤などの影響を受け、明治政府は明治元年（一八六八）、神仏分離令を発布しています。神仏混淆の寺社、大津坂本日枝神社・京都石清水神社・日光東照宮・鎌倉鶴岡八幡宮、さらには全国的に散在した神社内にある神宮寺Ⅱ別当寺は大きな影響を受けました。またこれを曲解して排仏毀釈へと発展しました。これは日本仏教史上一大法難とも言われています。薩摩・富山・松本・美濃苗木藩などでは、寺院の統廃合

が厳しく行われましたから、それらの檀家はどんな対応、あるいは動向であったかわかりませんが、大変だったと思います。またこれは曹洞宗に限ったことではありませんが、幕府は寛永十五年（一六三八）寺請証文を義務付けましたので、信仰の有無・如何に関係なく、いずれかの寺院の檀家に組み入れられましたので、よほど高い宗教意識や、独自の思想心情を持った人は別として、あまり影響はなかったのではないのでしょうか。その付近はよくわかりません。

司会

いくつかのご質問は、時間の関係で省かせていただいておりますけれども、お許しください。最後に、総括的な意味を含めまして、木村先生に次の質問に答えていただきたいと思えます。「瑩山禪師が全国へ教線を広げる時に、開祖道元禪師の考え方や教典を参考にしたのか、また影響はあったのかどうかお伺いしたい」と。

木村

私は、曹洞宗史の専門ではございませんので、誤解があったら、また専門の方からご指摘いただきたいと思えます。瑩山禪師の禅の世界は、その心をつくっているのは、やはり道元禪師の禅だと思えます。例えば、前述の坐禅のことで、瑩山禪師の『坐禅用心記』の中心となっているのは、道元禪師の『正法眼蔵』『弁道話』などに掲げられた「自受用三昧」であり、これは瑩山禪師にすっかり受け継がれておられます。他には、例えば先ほどの『瑩山清規』があります。清規で具体化したということを示し上げましたけれども、『清規』は、坐禅のやり方、形にしても、精神にしても、しっかり受け継いでおられると思えます。ただ、歴史的な経緯もあり、先ほど納富先生のほうからお話がありましたけれども、二層にも三層にもその独自の宗風を付け加えるといえます。そういような方向性があり、とくに密教的要素というのはかなり大きいと私も思っております。『瑩山清規』の中でも読誦するものとして陀羅尼がしばしば出てきますが、そういうことは、

道元禪師のものにはほとんど見られません。やはり新しい時代に即応するというか、時代対応のための問題が考慮されています。また、このことも関連しますが、先ほど申し上げた「大悲の坐禪」に代表される慈悲の心の展開の上で、どうしたら誰もが安らぎに至るのかという、そういう問題もあると思います。瑩山禪師は道元禪師の禪の肉付けをされているといましようか、そういうことがあったために、瑩山禪師だけではなく、その弟子たちの力も合わさって、大きく曹洞宗の教線を伸ばしていくことになったのではないのでしょうか。瑩山禪師には、道元禪師の禪の世界に足りなかったものを付け加えるという一面があります。私どもは、両本山という形が象徴するように、両祖の禪の調和・総合を目標としてこそ、望ましい禪の世界の展開ができるのではないのでしょうか。

司会

質問に答えをいただきますと同時に、本日のシンポジウムのまとめをしていただきまして、ありがとうございます。本当に不束な司会で申し訳ございませんでした。本日は会場から貴重なご意見、ご指摘をいただきました。ありがとうございます。また、いろいろとご多忙の中、本日ご来場いただきました皆さまに心より厚く御礼申し上げます。それでは、しめくくりを本学副学長であられます前田伸子先生にお願いいたします。

前田

本日は御移転百年記念の公開シンポジウムに多数お集まりいただきまして、ありがとうございます。私自身今年、所員になったばかりですので、今日の基調講演のお話や先ほどのシンポジウムのディスカッションでは知らないことばかりで非常に興味深く伺わせていただきました。歯学部出身ですので、歯学部関係のシンポジウムなどは私自身が計画したり参加したりしていますが、本日のようにフロアの方から非常に的確なコメントや厳しい質問をいただくシンポジウムは初めてで驚いております。これほど公開シンポジウムが盛り

上がりましたのは、ご参集いただいた皆様方のお蔭だと思います。お礼を申し上げまして今日の閉会の辞とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。